

青山フィルハーモニー管弦楽団

第 43 回外苑祭コンサートプログラムパンフレット別冊

発行日：2012 年 9 月 1 日

編集・発行：青山フィルハーモニー管弦楽団

■ プログラム

曲目

リスト／「ハンガリー狂詩曲」第 2 番

ボロディン／歌劇『イーゴリ公』より「だったん人の娘の踊り」、「だったん人の踊り」

ビゼー／組曲『アルルの女』より「前奏曲」、「メヌエット」、「ファランドール」

開催日：2012 年 9 月 1 日（土）、2 日（日）

開場時間：11 時

プレコンサートトーク：12 時 15 分

開演時間：12 時 30 分

会場：東京都立青山高等学校体育館

指揮

中水樹良（リスト）、大澤明瑠（ボロディン）、岡村繁（ビゼー）

■ コンサートのききどころ

第 43 回外苑祭コンサートは、**ビゼー**の組曲『**アルルの女**』で幕を開けます

歌劇『カルメン』と並ぶビゼーの代表作が、南仏アルルに近い農村を舞台とした劇音楽『アルルの女』です。

元来、合唱を含む 30 近い曲からなる劇音楽『アルルの女』は、今日ではビゼーが編纂した第 1 組曲と、ビゼーの死後に友人のギローが選んだ第 2 組曲という 2 つの組曲によって親しまれており、今回は第 1 組曲から「**前奏曲**」と「**メヌエット**」が、第 2 組曲から「**ファランドール**」が演奏されます。

物語の悲劇的な展開を暗示するような、プロヴァンス地方の民謡「3 人の王の行列」の旋律によって始まる「前奏曲」は、アルト・サクソフォンの甘美な旋律を経た後、ヴァイオリンによる神秘的な旋律が奏でられ、静かに幕を下ろします。

本編では第 3 幕の前に演奏される「メヌエット」は、ヴァイオリンがスタッカートによる鋭い旋律を奏でた後にアルト・サクソフォンとクラリネットによる優雅な旋律が現れ、再度冒頭の鋭い旋律が短縮されて再現されるという 3 つの部分から構成されています。

第1組曲の「前奏曲」で出てきた「3人の王の行進」によって始まる「ファランドール」は、プロヴァンス太鼓の響きの上に、プロヴァンス地方の舞曲であるファランドールの旋律が演奏され、熱狂の度合いを高めながら華やかに終わります。

2曲目として、**ボロディン**の歌劇『イーゴリ公』より「**だったん人の娘の踊り**」と「**だったん人の踊り**」が演奏されます。

中世ロシアの叙事詩である『イーゴリ軍記』を題材に、イーゴリ・スヴャトスラヴィチ公（1151-1201）の勇壮な戦いの姿を描いたのが、ボロディンの歌劇『イーゴリ公』です。

ボロディンは『イーゴリ公』を完成させることなく1887年に死去したため、友人であるリムスキー=コルサコフとグラズノフが加筆、補綴、編曲を行い、1890年に初演されました。

今回取り上げるのは「だったん人の娘の踊り」と「だったん人の踊り」で、クラリネットの軽快な旋律が印象的な「だったん人の娘の踊り」に続いて、序奏と7つの踊りが連なる「だったん人の踊り」を合わせて演奏します。

緩急を織り交ぜ、ときに力強く、ときに郷愁を誘うような旋律によって繰り広げられる壮大な音楽はボロディンの代表的な作品であるばかりでなく、オーケストラに親しみのない人でもどこかで耳にしたことのある、十分に聞きごたえのある作品です。

3曲目は、2012年度の青フィルの年間曲でもある**リストのハンガリー狂詩曲第2番**です。

1838年、ハンガリーは歴史的な大洪水に襲われました。義援金をハンガリーに届けたリストは、久しぶりに訪問した故国で、ロマ（ジプシー）が演奏する伝統舞踏の音楽を耳にしました。幼い日に親しんだ旋律に愛郷心を刺激されたリストは、故郷への思いをピアノに託し、15曲の「ハンガリー狂詩曲」を作曲、1853年に出版しました。

ウィーンで開いた慈善コンサートで一躍「ピアノの王者」として名声を博したリストは、ハンガリーで自らの代表作の一つである一連のハンガリー狂詩曲の手掛かりを得たのでした。

今回演奏するハンガリー狂詩曲第2番は、重々しい「ラッサン」の部分と、躍動的な「フリスカ」の部分からなる、緩急や明暗の対比の鮮やかな一曲であり、「ハンガリー狂詩曲」の全作品の中でも最も名高い作品となっています。

ビゼー、ボロディン、リストという、19世紀の音楽界を代表する作曲家の代表的な作品を青フィルがどのように演奏するか、ご期待ください。

青フィルの情報は下記のサイトで随時ご案内しております。

<http://www.geocities.jp/aoyamaphilharmonic/index.html>

■ 15 回目の年間曲

今年、青フィルに「年間曲制度」が導入されてから 15 回目のシーズンを迎えました。そこで、今回は、年間曲がどのような道のりをたどってきたかを振り返ってみます。

◇年間曲とは？

年間曲とは「1 年間を通して演奏する曲」のことで、9 月の外苑祭から翌年 4 月ないし 5 月に行われる定期演奏会まで、様々な場面で演奏される、文字通り 1 年間をかけて取り組む曲のことです。

年を通して練習が重ねられるだけに、演奏会のたびに進歩や変化の跡が見て取れることも年間曲のもつ大きな意義のひとつです。また、年間曲として取り上げられる曲は、各年度の代名詞として青フィルの団員や観客の皆さんから広く親しまれています。

◇これまでの年間曲

これまでに青フィルは、年間曲として 8 人の作曲家の 9 作品を取り上げてきました(表 1)。

表 1 年度別年間曲の一覧

年度	作曲家	曲名	指揮者
1998	エルガー	威風堂々第 1 番	川原明宏
1999	ワーグナー	楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』より第 1 幕への前奏曲	高倉彩
2000	シベリウス	交響詩『フィンランディア』	村尾雄太
2001	ドヴォルザーク	序曲『謝肉祭』	大部恵美
2002	ブラームス	大学祝典序曲	小原道子
2003	シュトラウス 2 世	歌劇『ジプシー男爵』序曲	森詩織
2004	ドヴォルザーク	序曲『謝肉祭』	中村静帆
2005	ブラームス	大学祝典序曲	高橋彩
2006	チャイコフスキー	スラヴ行進曲	西村新
2007	ワーグナー	歌劇『リエンツィ』序曲	堀仁美
2008	ブラームス	大学祝典序曲	渡辺恭祐
2009	ドヴォルザーク	序曲『謝肉祭』	坂井愛梨
2010	チャイコフスキー	スラヴ行進曲	高橋沙奈衣
2011	ブラームス	大学祝典序曲	佐藤和佳菜
2012	リスト	「ハンガリー狂詩曲」第 2 番	中水樹良

このうち、最も多く取り上げられているのはブラームスの大学祝典序曲(4 回)であり、これに続くのがドヴォルザークの序曲『謝肉祭』(3 回)とチャイコフスキーのスラヴ行進曲(2 回)となっています(表 2)。

表2 年間曲の作品別演奏回数

曲名	作曲者	回数	年度
大学祝典序曲	ブラームス	4	2002、2005、2008、2011
序曲『謝肉祭』	ドヴォルザーク	3	2001、2004、2009
スラヴ行進曲	チャイコフスキー	2	2006、2010
威風堂々第1番	エルガー	1	1998
楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』より第1幕への前奏曲	ワーグナー	1	1999
交響詩『フィンランディア』	シベリウス	1	2000
歌劇『ジプシー男爵』序曲	シュトラウス2世	1	2003
歌劇『リエンツィ』序曲	ワーグナー	1	2007
「ハンガリー狂詩曲」第2番	リスト	1	2012

特に、ブラームスの大学祝典序曲は2002年以來3年おきに取り上げられており、年間曲を代表する作品となっています。また、過去4回の演奏は、細部まで音を積み重ね緻密な構成が印象的であった2002年度、最終小節に向けて力強く音楽を展開した2005年度、柔らかでしなやかな演奏を特徴とした2008年度、節回しを短くすることで躍動感を生みだした2011年度、というように、それぞれ個性豊かな内容となっており、年間曲が各年度の青フィルを象徴する作品となっていることが分かります。

一方、シュトラウス2世の『ジプシー男爵』序曲(2003年度)やワーグナーの歌劇『リエンツィ』序曲(2007年度)のように、作曲者の名前は広く知られているものの、演奏される機会が比較的少ない作品も選ばれており、青フィルの選曲の幅の広さが示されているといえるでしょう。

◇青フィルに新たな可能性をもたらした「年間曲制度」

1998年度に「年間曲制度」が始まるまで、青フィルは、外苑祭コンサートが終了すると全て新しい作品を取り上げて定期演奏会に臨んでいました。

後に「オケフェス」の愛称で親しまれることになる全国高等学校選抜オーケストラフェスタが1995年1月に始まった際、4月に行われる定期演奏会に向けた練習を開始して間もない青フィルの参加は、日程的に難しいものでした。こうした状況を克服してオケフェスへの参加を可能にするとともに、年間を通して演奏する曲を決めることで音楽的にも技術的にも向上することができるのではないか、として導入されたのが「年間曲制度」でした。

そして、1999年1月9日の第5回以來、青フィルが昨年まで14回連続してオケフェスに参加していることから、この予想が適切であったことが分かります。

青フィルの一人ひとりの「新しい舞台に挑戦したい」という意欲が「年間曲制度」を生み、その「年間曲制度」が青フィルに新しい可能性をもたらしました。

今後も、「年間曲制度」は青フィルにとって不可欠であるとともに、様々な新しい物語を作り出すことでしょう。